
流星のロックマン4 ~

?? mystery ~

nasubiboy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロツクマン4 } ?? mystery }

【Nコード】

N4615Z

【作者名】

nasubiboy

【あらすじ】

地球の危機を3度も救ったロツクマンこと星河スバル。彼が中学生になるころ事件は起きた・・・WAXA調査隊の謎からすべてが始まる。謎の大陸とは？闇の組織の計画とは？すべての謎が解けた時、組織の計画とムー大陸滅亡の謎が解ける！交錯する想いと運命の中でスバルは世界を救えるのか？

記念すべき(?)なすびの一作品目！(流星シリーズ知ってること前提で書いてますんで宜しく)

プロローグ ～WAXA調査隊～（前書き）

始めました

駄文ですんません

これから100話目指して頑張ります

ブローグ WAXA調査隊

とある謎の地・・・

「こっこれは！あの大陸の遺跡？」

WAXA調査隊のリーダーは言った。

「リーダーこっこれは大発見ですよ！すぐにWAXAへ連絡を」

「ああ、勿論だ、これは人類史に残る大発見だろう。この大陸の発見は人類の発展にとって・・・」

と、その時・・・

グラグラグラ ドドドドドド！！

「リーダーここ崩れます！はやく退避を ぐ、ぐあー」

「・・・ポセイドン？・・・」

・・・これはスバルが巻き込まれる大事件の序章だった・・・

ブローグ ～WAXA調査隊～（後書き）

・
・
・

感想よろしく

中学校の準備（前書き）

やっと、学校終わりました

中学校の準備

ここはコダマタウン、ロックマンこと星河スバルが暮らしている。

「ZZZ・・・ZZZ・・・」

『おーいスバル起きろ!!! 今日スピカモールに買い物だろ!』

叫んでいるのはウォーロック。FM星育ちのAM星人だ。

「うーん・・・っは!いま何時?」

『8時半。約束は9時だぞスバル』

「やば〜い!委員長に怒られる!」

朝ごはん、着替えを風のように済ませ、ギリギリのところまでバス停へ。

「スバル君おそいじゃないの。まあいいわ、それよりゴン太よ!」

この女の子は委員長こと白金ルナ。あだ名のとおり小学校では委員長をやっていた。

中学校へ行ってもやるつもりらしい。

「ゴン太君、また牛丼ですかね。朝から牛丼って」

この小人のような少年は最小院キザマロ。マロ辞典を使いこなす

物知り。

「ははは、違うないね」

と、スバルが笑つてるところで奥から走ってくる人影。あれがゴン太、よく食べ、よく遅刻する。

「ごめん委員長。なんせ朝の牛丼が・・・」

「行くわよ。もう！」

と、一行はスピカモールへ中学校で使う物を買いに行くのだった。

そして…スピカモールについた。

「ふひ〜。まずは教科書のプログラム取りにいこうよ」

「えっ、まずは牛丼」お黙りゴン太！スバル君の言うとおりにしなさい！」「

というわけでプログラムやら、制服やら、靴やら、（ゴン太は牛丼用の紅シヨウガモ）を買った。

「よし買い物終わりね。つぎは・・・」

「委員長！お楽しみのあれですよ」

「そつだぜ！このために朝牛丼食ってきたんだから」

「えっ？なに？なにがあるの？」

「まつまさか！スバル君、ミソラちゃんのライブのチケット持ってない？」

「え〜〜〜〜！今日ライブって聞いてないよ！キザマロ教えてよ」

「スバルはライブなしだな。可哀そうに。」

『ふっドンマイだなスバル』

「うわ〜。ブラザーのくせにわすれるなんて。スバル君」

そしてライブ二時間前、スバルだけ帰宅となった・・・

「はあ〜。ミソラちゃん怒ってるかな？ライブ来てねーって言われてたし・・・」

『お前が悪いな。まあ帰るしかねーだろ』

とスバルは帰宅することになった

中学校の準備（後書き）

長いか？まあいいでしょう

ライブ前・・・(前書き)

ふう、連投で あ、後こころ辺戦闘ないんで

ライブ前……

バス停にスバルがいた時に電話がきた

「ん？だれだろ？ ブラウズ！」

「すくばるくくん！！なんでライブ会場にいないの！来てっ
て言ったよね！」

「この女の子こそトップアイドルで「自称戦うアイドル」、響ミソ
ラ。電波変換でハープノートになる。」

「ごめん！……（忘れてたなんて言えないし、どうしょ？あ、そ
うだ！）ちっチケットが売り切れて てさ……」

「はあ。スバルくん、忘れてたんでしょ……特等席用意して
るってメールしたじゃん」

「えっ、じゃあライブ見られるの……やった！今すぐ行く」

「今どこにいるの？できれば楽屋に来てほしいんだけど」

「いま、スピカモールのバス停だからすぐ行くよ」

「うん 早く来てね」

というわけでスバルもライブを見れることとなった。

そして楽屋。

「失礼します。あ、ミソラちゃん久しぶり！」

「何が久しぶりよ！ライブ忘れてたくせに！」

「（まずい怒ってる）ごめん！ほんとに」

「ふふっ、怒ってないよ 演技」

「え、怒ってないの。（よかった）」

『おい、ミソラ。お前がいるってことは……』

『何よ人を悪党扱いして、ウォーロック』

『っげ、出たハーブ』

ハーブとは、FM星人でミソラのパートナーである。

「スバル君、あと1時間半くらい時間あるし。モールまわんない？」

「いいよ、（ライブ忘れてた貸しがあるし……どこいく？」）

「うーんと……とりあえずパフェ食べて、それから駄菓子屋に……」

デート気分の二人であった。そしてライブ直前まで飛ぶのであった。

ライブ前・・・(後書き)

次はライブですね

ライブ！（前書き）

戦闘しばらくないって言ってたけど 次やる予定だったんでした
すんません

ライブ！

「み〜ん〜な〜！来てくれてありがとう！盛り上がっていくよ〜」

「委員長始めましたよー！」

「うおー！ー！！！！始まった！！！！ミソラちゃん！！！！」

「ゴン太！うるさい！」

委員長グループは一番前の列。と、言うのもキザマロがチケット発売日前日から店に並んでいたからである。

少し離れて、舞台裏。ここにスバルはいた・・・

「うわ〜。横から見ると違うねー！こんな近くで見られるなんて！」

「そつだな！でも俺は見れないわ・・・」

「なんでロック？」

「いや・・・ハーブが・・・」

「お呼びかしら？いくわよっ」

「いやだ〜！助けてくれスバル！う、ウワ〜」

地球は救えても、ロックを地獄からは救えないスバルであった・・・

そんな時・・・

「ドガン！！！！」

「ばっ爆発？ロック行こう、ってないか？」

『おう、いるぜ。逃げてきた』

「んじゃ行くよ、トランスコード003、シューティング・スター・
ロックマン！」

ウェーブロードに行くと、ジャミンガーがいた。

『所詮クズか、久しぶりの戦闘腕になるぜ！』

「ロックはいつも勝手にウイルス撃退してるじゃん！」

『ロックマンとしての戦闘だよ、ひさしぶりなのは！』

「いくよ！ロック」

『おう！』

ライブ！（後書き）

次はジャミンガー戦 余裕です

ライブ再開（前書き）

ジャミンガーって流星1しか出てなかった気が・・・

ライブ再開

「ロックバスター！」

ジャミンガーは、不意打ちを食らって大ダメージ、もう瀕死だ。

『スバル、とどめだ！』

「うん。バトルカード、キャノン！」

ジャミンガーはなぜか反撃もせず、ニタツと笑ってデリートされた・・・

「ふう、終わったね」

と、そんな時スバルは周りが見えてなかった・・・

『おい、スバル。お前にしては珍しく目立ちたがったか？ふう』

「えっ？」

そう、スバルはライブのステージのど真ん中で戦闘をしていたのだ。ライブはミソラだけでも

パニックなのに、ロックマンの登場でさらに大変なことに・・・

「~~~~~！！！！世界を救ったヒーローとミソラちゃんの共演だ！！！！」

「~~~~~まずい、ロックどうしようっっ」

『しらねーな、そのまま目立っどけ』

「え〜！僕、目立つの嫌いだって・・・」

そんなヒーローの心情なんて関係なく、ライブはさらに盛り上がっていく。

「みんな〜！今日は世界を救ったヒーローも来てくれたし、最後の曲は一緒に行くよ〜」

ミソラはロックマンにウィンクした。

「(は〜・・・一緒になって何すればいいの?)」

「それじゃー行くよー シューティングスター！」

「~~~~~~~~!!!!!!」

「ウェーブロード 広い世界 夜空見上げ 一人ぼっち キズナ探して ただ 彷徨う」

ウソに怯え 逃げ続けて 孤独にさえ 気がつかずに ただ 歌い続けていたの

星の光が 輝く 私の ココロに 降り注ぐ そして あなたと 巡り合えたんだ

Our band was discovered then

震えて 泣いていた 私を 見つけてくれたね シューティング・スター 暗闇 照らし 駆けてく

その 笑顔に チカラ もらうんだ 怖いものなんか何も無い

振り返らない ずっと 前を見て 光 掴む キミの 笑顔 それが 私の ハートなんだよ

シューティング・スター 暗闇 照らし 駆けてく

会場は最高潮に盛り上がって幕を閉じたのであった・・・そしてライブ終了後。

「委員長グループ」

「なんでスバル君が出てきたのですかね、マロ辞典にも載ってないですよ」

「そんなことより、駄菓子屋行こうぜ委員長。腹が減った」

「マロ辞典とやらに載ってるわけじゃないの、あとゴン太、駄菓子屋にはいかないで帰るわよ」

「え、いかないのかよ」

「いくわよっ」

という感じでコダマタウンへ帰って行った委員長グループだった。

ライブ再開（後書き）

次はスバル視点で

ライブ後（前書き）

ライブ後ですね

ライブ後

くスバル&ミソラく

「ふう、まさかステージのど真ん中に自分がいたとは・・・恥ずかしいよロック」

『仕方ねーだろ　ックック、俺は目立ててよかったぜ』

「まあロックはそうだけど・・・」

と、舞台裏でそんな会話をしていると

「ス〜バ〜ル〜く〜ん　かつこよかったよ」

ライブが終わってすぐなので、ライブ衣装のまま走ってきた。

「あ、ミソラちゃん　おつかれ」

「うん、スバル君のおかげでジャミンガーに邪魔されずに大成功のライブだったよ」

「んじゃ、僕かえ」ちよつと、このあと楽屋に来てくれない？」「

「あ、うん　いいよ。んじゃ先行ってるね」

「うん　すぐ行く　（今日絶対言いつて決めてたんだから　ファイ
ト&ミソラ）」

『ふふっ、今日こそ伝えるんでしょ ミソラ』

「うん・・・ライブよりドキドキするな・・・」

『だいじょうぶよ ミソラなら』

「でっでも、もしスバル君が私のこと嫌いなら・・・まっまたは、委員長のことを好きとか・・・」

と、一人で緊張しているミソラと何も知らないスバルであった。

ライブ後（後書き）

次は告白・・・と言いたいんですが邪魔が入ります

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット(現、タテ書き小説ネット)は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4615z/>

流星のロックマン4 ~ ?? mystery ~

2011年12月17日11時45分発行